



斎藤『英和中辞典』

まずは基本的なことを聞いてみよう。

問：次の違いを説明しなさい。

- 1 This toy is made of plastic.
- 2 Butter is made from milk.

こういうのは文法で習うのだろうか、それとも語彙として勉強するのだろうか。よく分からないが、例えば、「ランダムハウス英和大辞典」(小学館)には、

◆通例、原料を表す場合はfrom、材料を表す場合はof ; out of 《話》

という記載があり、

「オーレックス英和」(旺文社)には

◆原材料の質が変化する場合は from、変化しない場合は of, out of を用いるのがふつう。質が変化したかどうか不明のときは、from を使う方が多い。

と書かれている。「不明のときは」という記述にはちょっと笑いをそそられるが、それでも詳しい記述で役立つ情報といえるだろう。

ところが、君たちが持っている英英辞典のWORDPOWER(私の手元にあるのは第3版)を引くと、それぞれの用例は出ているが、使い分けに関する記述はない。こういう点は日本人が使う辞書の方が親切となのだろうか…と書いていたら、なんとこの「make of」と「make from」の違いを最初に辞書に記載したのは日本人らしいのである。それも大正4年(1915)という、日本人が英語と付き合い出してから、かなり早い段階である。

＊

世の中には「辞書好き」な人がいるのではないだろうか。かくいう私も辞書好きである(と思う)。国語辞典や古語辞典・漢和辞典も好きだが、英語系の辞書もそれなりに好き

である。

で、世の中には「辞書学」というものも存在し、「辞書編纂」「辞書批判」「辞書使用」の3分野があるという。「辞書使用」なんて何を研究するのだろうかと思うが、どういう時に(何のために)人は辞書を引くのかを調べることで、それを、どのような書き方をすると、辞書は人のニーズにフィットするのか(便利か)という、辞書を作る際の工夫に結びつけるのだそうだ。言われてみれば「なるほど」である。

＊

さて、さっきの「make」だが、この用法の違いを世界最初に記述した辞書は、有名な斎藤秀三郎の『熟語本位英和中辞典』(岩波書店、1915)という辞書であるという。この辞書が記述した後、それが本場の辞書にも影響を与えて、現在では最新版(2014年版)の Longman Dictionary of Contemporary English にも「made from は原材料の形がすっかり変わっている場合、made of は原材料が認識できる場合」(原文英語)というコラムが記載されるようになったそうだ。

この通称『斎藤英和』は、名著であり、辞書の古典としても名高い。「古典」に入ってしまったので、現代の人が使おうとする時に使いにくい部分や時代遅れになっている部分も多いらしいが、それでも添えられている例文と、その例文のこなれた訳には味わいがあるということで、辞書好き(英語好き)には人気である。絶版で長らく手に入らなかったが、岩波書店から丁寧な校注付きで再刊された。辞書が好きな人は、是非購入を。